

第54回造本装幀コンクール 受賞者インタビュー

文部科学大臣賞／日本書籍出版協会理事長賞：

『花森安治選集（全3巻）』



©佐藤祐介

出版社

暮しの手帖社

●御社の活動について教えてください。

暮しの手帖社の根幹である雑誌『暮しの手帖』は、今年、2021年9月で創刊73周年を迎えました。この『暮しの手帖』を中心として、別冊、書籍の刊行を続けております。

弊社は、戦後間もない1948年の9月に、花森安治と大橋鎮子のコンビで創刊しました。物のない時代でも、少しでもおしゃれで、豊かで、健康に暮らしたい女性のために。また二度と戦争を起こさないために、ひとりひとりが自分の暮らしを大切に作る世の中にしたい、という思いで創刊されました。

そして、誰かに阿ることない雑誌作りを貫くため、広告を一切入れない姿勢は、今を変わらず貫いています。

●今回の作品のような造本にされたのは、どういった経緯があったのでしょうか。

本企画の根底には、『暮しの手帖』での発表後、これまで書籍収録することなくあたためていた花森安治の言葉や文章を今の読者に届け、永く愛蔵していただきたいという願いがありました。

そこで、最近の商業本ではコストの点からなかなか採用できないことが多いのですが、思い切って函入り・上製で、保存性の高い仕様にしようと考えました。装釘家でもあり、本の造本には並々ならぬこだわりのあった花森の著書として、新しい読者の方にも、また花森が編集長だった時代からのファンの方々にも喜んでいただけるような、上質な本を作ろうと思いました。

以前、出版協会で映画『つつんで、ひらいて』の試写会があり、参加しました。そのときに菊地信義さんの装幀に対する情熱に触れ、またその会場に置かれていた美しい造本の本を見た時に、本書もここに置いていただけるような美しい仕立てにしたいと強く決心しました。

●応募したきっかけや、受賞の知らせの感想、周囲の反応など、いかがでしたでしょうか。

前述しましたが、なかなか函入り・上製の本を作る機会には巡り合いませんし、今回は出版協会で見えた美しい本作りを目指したこともありましたので、本書を応募させていただきました。

受賞のお知らせをいただいたときは、「まさか…」という驚きでした。函入り・上製とはいえ、特別な加工などは施しておらず、どちらかといえば素直な印刷しかしていないからです。あらためて賞の性格を確認したほど意外でした。

装幀造本に加え、企画や構成について評価していただきましたこと、大変光栄に思っております。創刊編集長である花森安治の本作りでしたので、重責を感じておりましたので、ひとつ果たせたのかもしれないという思いです。



●作品制作において、こだわった点、苦労した点、そのほか制作についてのエピソードがあれば教えてください。

本書は、激動の昭和を生きた編集長の軌跡を振り返り、懐かしむだけの本ではなく、現代の方にこそ届けたい花森からのメッセージ、警鐘と考えました。

そこで読者の理解を助けるために、脚注、章末註、文中註（割註）を細やかに、かつ、花森の文

章の邪魔にならぬよう、その味わいを壊さぬよう留意しながら付していきました。

また収録作品の多くが、元は『暮しの手帖』の誌面に写真と併せてレイアウトされた文章で、文字ばかりですと展開が単調になるため、花森のカットや当時の誌面のビジュアルを可能な限り挿入していきました。

装画は、当時花森が『暮しの手帖』に寄せた絵を使用してはいますが、古いレトロな佇まいだけにおさまらないように、モダンなデザインに仕立てていただきました。本表紙は透け感があり、特殊なエンボス技術により独特の表情と触感を持つタントセレクトシリーズ TS-1を採用し、スタイリッシュさを醸し出しています。

●一般の方には「造本」という言葉になじみがないかもしれませんが、「“造本”の観点から、本を視る」というポイントがあったら教えてください。また、電子書籍が広がる中で、紙の本への思いや良さなど、お聞かせください。

装幀や造本は、本の内容を具現化した「顔」であり「姿」です。

これは個人的な意見ですが、電子書籍のみで読んだ本は、例えるなら電話やメールだけのコミュニケーションと似ていると思います。一方、紙の本で読むことは直接会って、顔を合わせてコミュニケーションをしたということです。

直接触れますと、本に書かれていないことを、本の佇まいや雰囲気を感じ、触感も残ります。直接触れた本は、内容や書店で出会った記憶も深く読者にとどまり続けると思います。(了)